



持続可能社会に向けた多世代共創コミュニティ・エンパワメント開発評価

著者	安梅 勅江
発行年	2018
URL	http://hdl.handle.net/2241/00158912

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13430

研究課題名(和文) 持続可能社会に向けた多世代共創コミュニティ・エンパワメント開発評価

研究課題名(英文) Evaluation on Development of Intergenerational Community Empowerment for Sustainable Society

研究代表者

安梅 勅江 (Anme, Tokie)

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号：20201907

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、持続可能な社会の実現に向け、子どもから高齢者まで、障がいの有無や国籍にかかわらず多世代で共に創るコミュニティ・エンパワメントのプログラムを開発し、その効果を科学的に検証することを目的とした。多世代で共創するプログラムを住民自らが提案することで、多世代交流による認知症予防や虐待予防、緊急時の共助、インクルージョン、ネットワークづくりの促進を根拠づけた。多世代で楽しむ住民主体のプログラムを開発し、継続的に活動を共有する機会を作り、その効果を年代別に解析した。少子高齢化時代に適合した持続可能な地域活性化とともに、新たなコミュニティ・エンパワメントモデルを構築した。

研究成果の概要(英文)：We developed inclusive programs on intergenerational community empowerment for sustainable society and evaluated their effects. All the citizens living in the city were asked to give ideas for the programs. Through these procedures, the citizens have become very motivated, because they feel that these programs were their own. This caused them positive effects on prevention of dementia and abuse, emergency mutual support, inclusion, and networking. It is important to nurture the feeling of efficacy and comforts to promote affiliation. This new empowerment model is effective to realize sustainable community for all citizens enjoy together, regardless of age, health condition, and ethnicity.

研究分野：保健福祉学

キーワード：エンパワメント 多世代交流 コミュニティ 当事者主体

1. 研究開始当初の背景

子どもから高齢者まで、障がいの有無や国籍にかかわらず多世代で共創するコミュニティ・エンパワメントは、街づくりイベントなどで強調されている。しかし、保健福祉の視点からその効果についてコホートをを用いて科学的に明らかにした研究は、国内外で乏しい状況である。

著者らは25年以上にわたり、コミュニティ・エンパワメントに関する地域コホート研究を用いた実証研究を継続している(安梅、コミュニティ・エンパワメントの技法、医歯薬出版、2005)。多様な当事者を巻き込む多世代共創プログラムの効果測定により、科学的な根拠に基づく実用性の高いコミュニティ・エンパワメントのプログラムの開発が可能となる。

2. 研究の目的

本研究は、持続可能な社会の実現に向け、子どもから高齢者まで、障がいの有無や国籍にかかわらず多世代で共に創るコミュニティ・エンパワメントのプログラムを開発し、その効果を科学的に検証することを目的とする。

本研究では多世代で共創するプログラムを住民自らが提案することで、多世代交流による認知症予防や虐待予防、緊急時の共助、インクルージョン、ネットワークづくりの促進を意図する。

多世代で楽しむ住民主体のプログラムを開発し、継続的に活動を共有する機会を作り、その効果を25年継続している全住民追跡調査の軌跡分析により年代別に解析する。少子高齢化時代に適合した持続可能な地域活性化とともに、新たなコミュニティ・エンパワメントモデルを構築するものである。

3. 研究の方法

(1) 持続可能な社会の実現に向けた多世代共創エンパワメントプログラムのモデル開発

1) 国内外の多世代共創プログラムの開発過程、内容、評価の系統的レビュー、2) 25年間追跡データの分析結果、3) 住民と専門職のフォーカス・グループ・インタビューにより得られた情報、4) プログラム実施によるプロセス評価、6) プログラム実施のアウトカム評価、を総合的に分析し、統計的妥当性及び臨床的重要性を加味しながら、プログラムのモデルを開発する。

(2) 多世代共創エンパワメントプログラムの効果に関する科学的な根拠の提示

25年間追跡調査データに開発した評価指標を適用し、対象の年齢、性別、身体機能などの特性別に、プログラムの精神面・身体面への効果の軌跡とその関連要因を科学的な根拠として提示するとともに、介入研究によるプログラムの妥当性を明示する。

(3) 持続可能な社会実現に向けた多世代共創エンパワメントプログラム普及化地域や施設機関において、多世代共創プログラムを用いたコミュニティ・エンパワメントを促進するため、具体的な活用につながるさまざまな形の実践例を提示する。

子どもから高齢者まで、住民、専門職、近隣地域などに向けて、実際に活用する際の目的、方法、進め方のコツ、把握する必要のあるポイント、予測される成果などを詳細に解説したホームページを作成し、広く利用可能とする。

4. 研究成果

(1) 多世代共創エンパワメントプログラム住民調査結果

持続可能な社会の実現に向けた多世代共創エンパワメントプログラム調査の結果、多世代共創を促進する要因は、外出や人と接するなどの「社会との関わりや外出」「運動をすること」「クラブや地域グループへの参加」「他者との交流」「新聞や本、ニュースなどを見る」「カラオケ」「役割をもつこと」などの意見が多く得られた。人と交流する機会の重要性や趣味や余暇に関する意見が多くあがり、日常的にはあまりこれまで接することのなかった他世代との交流を含めた多世代交流や、コミュニティづくり、趣味、役割創出などの生きがいづくりの支援の必要性が示された。

さらに持続可能な社会の実現に向けた生活支援へのニーズでは、病院やりハビリ施設への「送迎サービスの充実」や「病院へのタクシー送迎制度の見直し」「福祉タクシーチケット券の上限設定の見直し」など医療機関と自宅間の送迎に関する制度への要望の声が多くあがった。

また、「話し相手づくり」へのニーズや、1人ひとり状況が違う中での制度の垣根を越えた「段階や個別性に合わせたサービス」の必要性に関する声が多く聞かれた。今後得られたニーズをもとに、さらなる細やかな包括的な多世代共創エンパワメントプログラムの開発が期待される。

ニーズの抜粋を下記に示す。

- 1) 多世代共創に効果的な要因
 - ・社会との関わりや外出
 - ・クラブや地域グループへの参加
 - ・多世代との交流
 - ・脳トレ
 - ・畑仕事
 - ・趣味
 - ・カラオケ
 - ・無理をしない
 - ・機能低下の早期発見
 - ・生活の中で頭を使う
 - ・認知症について勉強すること
 - ・運動すること

- ・規則正しい生活
- ・新聞や本、ニュースなどを見る
- ・自分でできることは自分です
- ・目標を持ったり自分の思うよう生きる
- ・健康的な食事への関心
- ・役割を得ること
- ・指先を動かす
- ・喪失などイベント後のメンタルケア
- ・家事などをする
- ・オリジナル体操実施

2) 生活支援ニーズ

- ・送迎サービスの充実
- ・買い物支援、家事手伝い
- ・訪問サービスの充実
- ・物品の貸し出し
- ・細やかなデイサービスの充実
- ・福祉タクシーチケット券
- ・見守り支援
- ・夜間の預かり
- ・病院へのタクシー送迎制度の見直し
- ・介護者家族支援の充実

(2) 多世代共創エンパワメントプログラム 専門職調査結果

以下に具体的な発言を抜粋し記載する。

1) 仲間づくり

「仲間づくりをしていこうと検討しています。仲間づくりを通して活気が出て元気になってくれればいい。活気が出て元気なお年寄りが増えれば、いずれは国民健康保険の医療費が減るのかなと、そういう街になればいいなと思っています。」

2) 多世代交流

「高齢者は子どもとふれあいたいといわれます。高齢者と子どもが触れ合えるような機会が必要です。昔は子どもたちが教室などにきて交流があったようです。くる側にメリットがないので、スキルをもてるようなふあげ講座をやってふあげを教える高齢者を保育相談に派遣するとか、そうすれば互いにウィンウィンになるのかなと思っています。」

3) 楽しみ、生きがい創出

「バスの添乗もそうですが、クラブに見えた方のお昼ごはんまでの間、ロビーを借りて折り紙なり、お手玉とか、脳トレをやっています。折り紙で傘をつくったり、鶴でも羽がいっぱいあるものをつくったり、年寄りになってくると手先を使うことが少なくなって久しぶりに鶴を折ったわとかどうやって折るの?と会話しながらああ、思い出した。孫に教えようとか笑顔が出る、楽しいことを見つけてもらえてよかったなと思っています。これからもアイデアを見つけて進めていきたいと思っています。」

「今まで高齢者の施策は課題解決のためのもので、住民のニーズがあって、それをどうやっていくかというところでやってきました。それだけではなく、楽しみや生きがいづくりを、これから重点的にやっていかない

といけないかなと思っています。楽しみのために元気でいよう、運動をがんばろうと、目標のために努力していけば介護予防につながり、医療費が安くなる最終の目標につながっていきます。マイナスを補うのではなく、一人ひとりの住民がもっている力、やりたいことを実現するためのきっかけになることを見つけれたらなと。」

「仲間づくり、生き甲斐づくりを考えさせられます。家族の中で居場所があり、お年寄り扱いされるのではなく、90歳、95歳の方も家族の方が本人さん自身に任せているんだなと感じました。生き甲斐づくり、自分もこんなことができるということを考えていけたらいいのかなと思いました。」

4) 住民の声に根差した活動

「社会福祉協議会として何ができるか、まずは地域、住民の方とふれあい、その中から要望を吸い上げて、できることはやっていければいいな、できないことは関係部署へ下ろして、できる限り住民の要望が叶うようにみんなでやっていければいいかなと思っています。」

「社会福祉協議会として見守り訪問をする。ホームセンターにいきたいわ、という声があったのでホームセンターへのお買い物ツアーをやろうと、事業を起こしたんです。一つのニーズだったんですが、実際にやってみると申し込み者が4人だったので4人のニーズがあった。そういうことがさらに入れられたらいいなと。足元の事業計画をコツコツとやって、そこへつなげていきたいと思っています。」

5) 住民主体の活動

「できれば全世代での仕掛けづくりの裏方に徹したいです。今までの事業でも、きっかけがないと、最近よく耳にします。きっかけづくりをこれから事業の中でやっていって、いつのまにかみなさんが巻き込まれてやっているということになればいいなと思っています。今後もきっかけづくり、仕組みづくりをやっていきたいと思っています。」

6) ワンコインサービスなどサービスの拡充

「新たにワンコインサービスを始めました。それを会員さんたちにどれだけ浸透できるかということと、住民のみなさんがそれをやっていただけるように、シルバー人材センターの方に仕事がくるかどうか課題かなと思っています。」

「いろいろ勉強しながらやっている段階です。シルバー人材センターとしてこれから何ができると考えています。お話を聞いて徐々に進めていっている形で、それがシルバーに合うかどうかは先の話になりそうです。やっていながらこなしていく段階だと思っています。」

7) 生涯充実感を味わえる環境づくり

「年齢を重ねていくと、いろんなものを失くしていくんです。友だちとか自分の生活の中での立場とか、そこを穴埋めできること、

親しい人、友だちが亡くなったらセンターで友だちを増やしていく。家庭の中で自分の食べるもの、着るものでさえ、遠慮して居場所を失くしていくなら、ここでお買い物バスを出して自分の食べたいものを買える環境をつくる。失くしたものを補充していくことを心がけて仕事をしています。」

(3) 考察

本研究は、保健福祉分野で求められる当事者主体、インクルージョン、エンパワメントを統合した多世代共創プログラムを開発し、25年にわたる長期的な追跡調査と介入研究を用いて、疫学および発達心理分野の「科学的な根拠」に基づくプログラム開発を行った点で、きわめて学際的で斬新な着想と方法論を提案したものである。

これまで多世代共創の効果に関する研究は、個人レベルの評価にとどまっていた。しかしコミュニティ・エンパワメントと結び付けることで、地域活性化やインクルージョンの促進など、実生活に結び付いた保健福祉支援として大きく発展する可能性を示した点で、新しい原理を提案したものである。

著者らは、すでに25年にわたり本フィールドで地域保健福祉サービスを継続的に提供し、毎年、子どもの発達状況、健康診断情報、死亡状況、医療費などのデータを収集しており、長期間の変化の動向について多角的な情報解析を可能とした。コホート研究を用いた妥当性の検証は、今後さまざまなプログラムの「科学的な根拠」を確立する方法論の提案となる点で画期的と言える。

本研究の卓越した成果としては、多世代共創プログラムの科学的な根拠を明示することで、街づくり計画などにおける地域活性プログラム、施設機関における地域支援プログラムとして活用し、プログラムの有効性に関する確固とした意義付けにつながった点である。

また、25年に及ぶ追跡研究に基づき、プログラムの効果を評価し、その根拠に基づくコミュニティ・エンパワメントのプログラムを開発することは、日本はもとより海外にも乏しく、国際的な意義は大きい。

研究の成果は、科学的な根拠に基づくコミュニティ・エンパワメントのプログラムとして、広く多くの地域で活用するとともに、コミュニティ・エンパワメント効果の軌跡や影響要因、妥当性に関する知見は、実践における定期的な評価の参照情報として、また専門職の養成研修などに利用している。

さらに、昨今高まる一方の当事者主体の支援ニーズに答え、地域住民と専門職が協働して遂行する生涯におよぶ地域保健福祉サービスの質向上に資するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

Anne T, Tanaka E, Watanabe T, Tomisaki E, Watanabe K, Child development and the care environment: longitudinal perspective, *Advances in psychology research*, 116, 2017, 197-205, 査読有
Watanabe K, Sakayori M, Uruno K, Mitsuko Uruno, Anne T, The effect of exercise with music on the subjective well-being of nursing care users, *International Journal of Nursing Science*, 7, 2017, 44-48, 査読有
渡邊久実, 田中笑子, 安梅勲江, ライフコースアプローチによる思春期のwell-being 実現に向けた要因解明, *発達研究*, 31, 2017, 215-220. 査読なし
渡邊久実, 奥村理加, 安梅勲江, コミュニティエンパワメントの効果検証
26年に及ぶコホート成果から, *地域保健*, 48, 2017, 215-220, 査読なし
Chen W, Tanaka E, Watanabe K, Tomisaki E, Watanabe T, Wu B, Anne T, The influence of home-rearing environment on children's behavioral problems 3 years' later, *Psychiatry Research*, 244, 2016, 185-193, 査読有
Watanabe K, Tanaka E, Watanabe T, Chen W, Wu B, Ito S, Okumura R, Anne T, Association between the older adult's social relationships and functional status in Japan, *Geriatrics and Gerontology International*, 17, 2016, 1522-1526, 査読有
富崎悦子, 平野真紀, 田中笑子, 渡辺多恵子, 伊藤澄雄, 奥村理加, 安梅勲江, コミュニティ・エンパワメント展開のためのニーズ把握 - 3年間での推移 -, *厚生*の指標, 63, 2016, 34-42, 査読有
酒寄学, 宇留野光子, 宇留野功一, 安梅勲江, 社会福祉法人のエンパワメント・プログラム評価 - 夢の花ワークショップの活用に向けて -, *社会福祉学*, 57, 2016, 69-77, 査読有

[学会発表](計9件)

Anne T, Community Empowerment After Disasters and Disaster Preparedness in Japan, *International Conference on Systems Sciences for Health and Social Services*, 2017.3.30, Sweden
安梅勲江, 子育て子育てエンパワメント～コホート研究から～, 第111回「子ども学」講演会, 2017.5.18, 神戸
Anne T, Social interaction, social ties, and longevity in a community-dwelling sample in Japan, the 21st International Association of Gerontology and Geriatrics World Congress, 2017.7.27, San Francisco

Anne T, Creating Inclusive Communities with “Dynamic Synergy Model”, Systemed research meeting, 2017.11.8, Germany

安梅勅江, エンパワメント科学: だれもが主人公、新しい共生のかたち, 第 21 回認知神経科学会学術集会, 2016.8.7, 東京.

渡邊久実, 田中笑子, 渡邊多恵子, 奥村理加, 伊藤澄雄, 安梅勅江, 地域在住高齢者の社会関連性が介護予防に及ぼす効果, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 2016.10.26-28, 大阪

奥村理加, 欧陽玲玲, 楊亜舒, 渡邊久実, 田中笑子, 渡邊多恵子, 伊藤澄雄, 安梅勅江, 高齢者の生活習慣と3年後の身体的、精神的健康の影響 日常生活圏域ニーズ調査結果, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 2016.10.26-28, 大阪

伊藤澄雄, 渡邊多恵子, 鎌田彩加, 田中笑子, 奥村理加, 渡邊多恵子, 安梅勅江, 「キラリとびしまのびのび体操」普及に向けた住民ニーズの検討, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 2016.10.26-28, 大阪

渡邊多恵子, 田中笑子, 富崎悦子, 渡邊久実, 河西敏幸, 安梅勅江, 住民主体の介護予防事業の効果と要介護リスク要因の推定, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 2016.10.26-28, 大阪

富崎 悦子 (TOMISAKI, Etsuko)
恩田 陽子 (ONDA, Yoko)
呉 柏良 (WU, Bai liang)
金 春燕 (KIM, Syunen)
渡辺 久実 (WATANABE, Kumi)
荒川 博美 (ARAKAWA, Hiromi)
厚澤 博美 (ATUZAWA, Hiromi)
加藤 慶子 (KATO, Keiko)
伊東 花江 (ITO, Hanae)
鎌田 彩加 (KAMATA, Ayaka)
坂田 美樹 (SAKATA, Miki)
欧陽 玲玲 (OUYANG, Lingling)
楊 亜舒 (YANG, Yashu)
年野 朋美 (TOSHINO, Tomomi)
坪田 彩 (TSUBOTA, Aya)
魏 晨 (WEI, Chen)
劉 海涵 (LIU, Haihan)
陳 攀攀 (CHEN, Panpan)

〔図書〕(計1件)

Anne T, Empowerment: Cross-Cultural Perspectives, Strategies and Psychological Benefits, Chapter1: New Empowerment Model on practical strategies for wellbeing, Nova Science Publishers, 2016, 3-16

〔その他〕

ホームページ等

多世代コミュニティ・エンパワメントに向けたコホート研究

<http://plaza.umin.ac.jp/~empower/cec/>
Community Empowerment and Care

<http://plaza.umin.ac.jp/~empower/cec/index-e.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安梅 勅江 (ANME, Tokie)

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号: 20201907

(2) 研究協力者

伊藤 澄雄 (ITO, Sumio)

奥村 理加 (OKUMURA, Rika)

澤田 優子 (SAWADA, Yuko)

田中 笑子 (TANAKA, Emiko)

渡邊多恵子 (WATANABE, Taeko)